

ノヴゴロドのステファン著『コンスタンティノーブル旅行記』 抜粋の和訳と文法的注釈

池澤匠・勝又菜摘・鎌倉啓伍

はじめに

本稿は東京大学文学部・大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室で 2021 年度 A1A2 タームに開講された、スラヴ語圏言語文化特殊研究「ロシア語史」(担当: 三谷恵子教授) の授業報告として、ノヴゴロドのステファンによる『コンスタンティノーブル旅行記 (Хождение Стефана Новгородца)』の抜粋の和訳ならびに文法的注釈である¹。底本は『古代ルーシ文学全集』の第 6 巻に収録される、16 世紀前半のテキストを採用する。

著者とされるステファンについて詳しいことは分かっていないが、ノヴゴロド公国の使節として 1348 年ないし 1349 年に 1 週間はコンスタンティノーブルに滞在したようである。ステファン自身は聖職者でなく、平信徒であったことが確実視される。作中の文体は比較的平易であり、教会スラヴ語の影響が限定されている。当時の名所の大部分が記述される本作は、中世後期のコンスタンティノーブルの地理に関する貴重な資料であるのみならず、「タタールのくびき」を経てルーシが外界との交流を再開したことを証しており、歴史的意義が大きい文献である。

続く「古文読解の基本事項」では現代ロシア語の既習者が古文を読む際に必要な最低限の注意事項を示す。本稿では授業報告であることを踏まえ、また古文読解の実践的教材となることを期し、原文に対する文法的注釈は主に現代ロシア語と異なる音韻・形態・統語・語彙の運用に着目する。本文内では各単語の形態的分類ならびに現代ロシア語訳を、脚注には補説として、音韻史・構文に関する事項や用語の解説などを記載する²。後者の場合、本文に該当する箇所を下線で示す。

¹ Дмитриев (1999, с. 30–41, 515–516). 訳出に当たっては上記全集に掲載の現代ロシア語訳ならびに Majeska (1984, pp. 15–47) の英訳を参照している。本稿では前者に記載される 26 段落の本文のうち、1-7・16-18・25-26 番目を扱う。1-4 段落は池澤、5-7 と 16 段落は鎌倉、17-18 と 25-26 段落は勝又が訳出と注を担当し、脚注と「古文読解の基本事項」を含めた全体の責任は池澤が負う。

² 解説で用いる文法用語については中沢 (2011) ならびに原 (2021) などを参照している。なお略語として古代教会スラヴ語は「古教ス」、古東スラヴ語は「古東ス」、現代ロシア語は「現露」、ウクライナ語は「宇」、ポーランド語は「波」、ブルガリア語は「勃」、ボスニア・クロアチア・モンテネグロ・セルビア語は BCMS などと記す。

古文読解の基本事項

現代語と異なり、古文は画一的な正書法・文法体系・語彙が確立されておらず、綴りなどに揺らぎが見られる。また近代に至るまでロシア古文は長らく古代教会スラヴ語や古東スラヴ語の影響を受けたため、本稿で扱う中世のテキストも、複雑な文法体系が色濃く残っている。以下は古文の読解にあたって注意すべき基本的な事項である。

(1) 古文の ѣ と ѧ は、かつて短く発音された弱母音を表す (/ǫ/と/ɨ/)。やがて母音としては発音されなくなり、語末の ѣ は 1918 年の文字改革で記されなくなった。現代ロシア語に至るまで ѣ と ѧ は完全母音 o と e になるか、脱落している (сон < сѣнь, шел < шѣль)。

(2) 古文の ѣ はかつて [ie] の音を表しており、[e] を表す е とは別個であった。ロシア語では е も [ie] と発音されるようになり、1918 年の文字改革で統合された。音素としての ѣ (/ě/) は主に長母音 *ē に由来する (cf. сѣмя (семя), 羅 sēmen 「種」)。

(3) かつてスラヴ語では単数・複数に加えて印欧祖語から引き継いだ双数が文法範疇として成立しており、名辞類・動詞で別個の語変化が存在する (двою руками 「両手で」)。

(4) 現代語の前置格はかつて単独で用いることができたため、古文の研究では一般的に「所格」ないし「処格」と呼ばれる (Новѣгородъ 「ノヴゴロドで」)。

(5) スラヴ語の古語ならびに古文の研究では、名辞類・動詞の分類が幹母音 (テーマ母音) で分類される。印欧祖語の語構造を引き継ぐスラヴ祖語では原則として [語根+幹母音+語尾] で各語が形成され、幹母音の質と有無で語変化が異なる場合がある。分かりやすい例では、現代ロシア語の第 1 変化動詞の幹母音は元々 -e- であり、第 2 変化動詞は -i- である (несет < *nes-e-tī, молит < *mol-i-tī)。名詞の場合は複雑だが、第 2 変化名詞は元々 a 語幹であり、第 3 変化名詞は大部分が i 語幹である (複数造格 беседами < *besed-a-mi, людьми < *ljud-i-mi)。これに加え、幹母音が欠ける無テーマ動詞と子音を含む子音幹名詞も存在する (есть [< быть] < *es-ǫ-tī, 単数与格 имени < *im-en-i)。

(6) 古文の形容詞は長語尾と短語尾の双方が述語的にも、修飾的にも用いられる。短語尾の格変化は o/a 語幹名詞に準ずる (Новгород < новъ городъ 「新しい街」)。

(7) 古文は現代ロシア語に比べ、過去時制が豊富である。過去の行為を単に述べるアオリスト (3 人称単数 несе 「運んだ」)、継続や反復を表すインパーフェクト (несѣше 「運んでいた」)、現在完了 (есть неслъ 「運び終わった」)、過去完了 (былъ неслъ 「運び終わっていた」) が用いられる。

(8) スラヴ語の古語ならびに古文の研究では、現代ロシア語でいう形動詞・副動詞が分詞に分類され、能動・受動と現在・過去の 4 つのカテゴリーに分かれる。

この他にも、筆記・形態・統語・語彙などの面で現代ロシア語と異なる点が多いが、参考文献ならびに脚注を参照されたい。

和訳と文法的注釈

[1] Азь⁽¹⁾³, грѣшный Стефанъ из Великаго⁽²⁾⁴ Новагорода⁽³⁾, съ своими друзы⁽⁴⁾⁵ осмыю⁽⁵⁾⁶ приидох⁽⁶⁾ въ Царыградъ поклонитися⁷ святымъ мѣстомъ⁽⁷⁾⁸ и цѣловати тѣлеса⁽⁸⁾⁹ святыхъ. И помилова⁽⁹⁾ ны⁽¹⁰⁾ Богъ святыи⁽¹¹⁾ Софеи⁽¹²⁾¹⁰ Премудрость Божия⁽¹³⁾¹¹. В недѣлю Страстную приидохом⁽¹⁴⁾ въ градъ¹², и идохомъ⁽¹⁵⁾ къ святѣй⁽¹⁶⁾ Софеи⁽¹⁷⁾.

【注 1】 (1)=я で人称代名詞 1 人称単数主格。(2) 硬変化形容詞 великъ の男性単数生格長語尾。(3) новъ + городъ で硬変化形容詞 новъ の男性単数生格短語尾に о 語幹男性硬変化名詞 городъ の単数生格が加わった形。(4) о 語幹男性硬変化名詞 другъ の複数造格。(5) = восемью。(6) е 語幹動詞 приити のアオリスト 1 人称単数。(7) о 語幹中性硬変化名詞 мѣсто の複数与格。(8) es 語幹中性名詞 тѣло の複数対格。(9) je 語幹動詞 помиловати のアオリス

³ 現代の主たるスラヴ語ではブルガリア語・マケドニア語・スロベニア語を除いて人称代名詞 1 人称単数主格が я ないし ja などとなっているが、かつては азь が広く用いられていた。я は азь に語頭添加音*j が発達し、弱母音と語末子音が脱落した形である (я < аз/яз < азь/язъ < *(j)azǔ; cf. 希 ἐγώ, 羅 ego)。ロシアの古文では文体や格調によって使い分けられる。

⁴ スラヴ語の形容詞長語尾は о/а 語幹の格語尾に人称代名詞が付された形に由来し、本来の男性・中性単数生格は-ago < *-ajego < *-a + *jego である。現露の-oro は 1918 年の文字改革で用いられるようになった語形であり、発音上の[-ово]は物主形容詞か ŭ 語幹名詞の複数生格語尾 (*-ovŭ) の影響を被っている。

⁵ 現露の名詞は複数造格で語尾-ами/-ями/-ьми をとるが、第 1 変化名詞に発展した古語の о 語幹名詞では硬変化で-ы, 軟変化で-и となる。複数主格・対格と混同しやすいので注意。詳しくは脚注 73 参照。

⁶ 語頭添加音は脚注 3 で示した*j の他に*v があり、前者は前舌母音、後者は後舌母音の前に置かれる。しかし特に*v についてはスラヴ語の中でも付加が徹底しておらず、本文のように в が無い語形も散見される (cf. 現露 ухо, 字 вухо)。

⁷ 本来の不定接辞は-ти であるが、現露ではアクセントが接辞に置かれる動詞 (нести, вести) を除いて-тъ に転じた。古文の現在 3 人称単数 (носить < несити) は現露の不定形と混同しやすいので注意。

⁸ 脚注 5 と同様に、第 1 変化名詞に発展した о 語幹名詞の複数与格語尾は本来、硬変化で-омъ、軟変化で-емъ である。単数造格 (-омъ, -емъ) と混同しやすいので注意。詳しくは脚注 73 参照。

⁹ 現露 тело は第 1 変化名詞であるが、かつての тѣло は слово 同様に es 語幹を持つ子音幹名詞であった (単数生格 тѣлесе, словесе)。子音幹名詞の幹子音は派生語に残る場合がある (cf. телесный, словесный)。

¹⁰ 教会として「聖ソフィア」に言及する際に男性形が用いられるのはプスコフ方言の特徴だとされる (cf. Шахматов, 1909, с. 117)。よって Сперанский (1934) はテキストがノヴゴロドの起源でありつつも、写本としてはプスコフ方言の影響を被ったものが残っているか、著者がノヴゴロドではなくプスコフで旅行記を執筆した可能性を示唆している。

¹¹ Богъ と Премудрость Божия は並列構文ないし и の省略と考えられる。Cf. «И избра богъ и святыи Софеи премудрость божия слоужителя своему престолу...» (Псковская 3-я. С. 172). なお божии 型の物主形容詞は接辞*-ij-で形成されるため、第 1 硬口蓋化が生じる ([ž] < *g)。

¹² 現露でも残る город/град (< *gordŭ)は母音重挿と非母音重挿 (полногласие и неполногласие) の例であり、前者は東スラヴ語に、後者は南スラヴ語に特徴的な形である。

ト3人称単数。(10) 人称代名詞1人称複数対格。現露の нас は本来生格形。(11) 硬変化形容詞 святыи (= святой) の男性単数主格長語尾。(12) a 語幹女性軟変化名詞 София を男性化した o 語幹男性軟変化名詞 (?) Софеи の単数主格。(13) 物主形容詞 божи (< богъ) の女性単数主格短語尾。(14) e 語幹動詞 приити のアオリスト1人称複数。(15) e 語幹動詞 ити のアオリスト1人称複数。(16) 硬変化形容詞 святыи の女性単数与格長語尾。(17) a 語幹女性軟変化名詞 София の単数与格。脚注 10 参照。

【訳 1】 わたし、大ノヴゴロドの罪深きステファンは、8人の仲間を連れ、聖地に参詣して、聖人の遺物に接吻するために、ツァリグラードへ向かった。神 [と] 聖ソフィアの神の知恵は、我々に憐れみを示され、受難週に街に着き、聖ソフィア聖堂に赴いた。

[2] Ту⁽¹⁸⁾ стоить¹³ столпъ чюдень¹⁴ вельми⁽¹⁹⁾ толстотою¹⁵ и высотою и красотою, издалеча⁽²⁰⁾ с моря видѣти его. И на верху⁽²¹⁾ его сѣдитъ⁽²²⁾¹⁶ Иустинианъ¹⁷ Великы⁽²³⁾ на конѣ велми чюдень: аки⁽²⁴⁾ живѣ, в доспѣсѣ⁽²⁵⁾¹⁸ сороцинском⁽²⁶⁾¹⁹, грозно видѣти его, а в руцѣ⁽²⁷⁾ яблоко злато⁽²⁸⁾ велико⁽²⁸⁾, а въ⁽²⁹⁾ яблоцѣ⁽³⁰⁾ крестъ, а правую руку от себе⁽³¹⁾²⁰ простеръ⁽³²⁾²¹ буйно на

¹³ 現在3人称単数の活用語尾は初期スラヴ語の時点で*-tīであったと考えられる(希 ἐστί(esti) “is”)。古代教会スラヴ語では стоить のように末母音が後舌化するが、東スラヴ語では стоить のように語末子音が軟化する(現字 стойть)。しかし現露では硬化した形が一般的となっている(стоит ただし есть)。

¹⁴ 現露の正書法では ч などの後に軟母音は記されないが、古文では軟子音の後でも、しばしば軟性の標識として軟母音が続くことがある。

¹⁵ 現露で第2変化名詞ならびに形容詞女性の単数造格語尾は-ой/-ейが一般的であり、-ою/-еюは古風な形であるが、古文では後者の本来の形が多い。

¹⁶ 現露の сидит < сидеть にあたる。東スラヴ語では語根が sid- < *sēd-となるが、ФасмерはФ.Ф.Фортунатовに従って現在形*sēdiši, *sēditiなどの形で逆行同化した影響としている一方(Т.3.С.618)、第一音節の*Cě-がアクセント前で*Ci-に転ずる東スラヴ語の音韻規則の現れ(字 дитина < *děti + *-ina)とも説明される(ЕСУМ.Т.5.С.227)。

¹⁷ 東ローマ帝国ユスティアヌス王朝の第2代皇帝であるユスティアヌス1世(527~565年在位)のこと。領土を大きく拡大し、建設事業で聖ソフィア聖堂を建立した。

¹⁸ o 語幹硬変化名詞の単数所格ならびに a 語幹硬変化名詞の単数与格・所格の語尾-ъ²は二重母音*-oiに由来し、語幹末が-г/-к/-хの場合、第2硬口蓋化が生ずる(-зѣ/-цѣ/-сѣ < *-goi/-koi/-xoi)。

¹⁹ 中世にヨーロッパ人が西アジアのアラブ人・イスラム教徒に対して用いた名称である。

²⁰ 現露 себя は元来の生格*sebe と対格*se の混淆。

²¹ 現露でいう простереть (простру, прострѣшь...) は古教スで прострѣти、古東スで простерти ないし простерети となる*prosterti に由来する。よって不定語幹は e 音梯の*pro-ster-であるが、現在語幹はゼロ音梯*pro-str-から生じた*pro-stir-である(古教ス простърж)。この能動過去分詞は現在語幹から形成され(простъръ/простърша < *pro-stir-ūs-s/*pro-stir-ūs-(j)a)、本文の形は弱母音の強化と脱落を経ている(простер < простъръ)。現露の副動詞過去には простерев と простѣрши の2つの形が存在するが、前者は新たに不定形 простереть から派生したもので、後者がより古い形である。

полѣдни⁽³³⁾²² на Сороциньскую землю, къ Иерусалиму. Суть⁽³⁴⁾ же инии⁽³⁵⁾²³ стльпове⁽³⁶⁾²⁴ мнози⁽³⁷⁾²⁵ по граду стоятъ от каменѣ⁽³⁸⁾ мрамора, много на них⁽³⁹⁾²⁶ писанія⁽³⁹⁾²⁷ от врѣха⁽⁴⁰⁾²⁸ и до долу⁽⁴¹⁾ писано⁽⁴²⁾ рытию⁽⁴³⁾ великою. Много дивитися и умъ не можетъ сказати: желѣзо каменѣ того не иметь⁽⁴⁴⁾²⁹.

【注 2】(18) = тут。(19) = очень。(20) = издалека。(21) ū 語幹男性名詞 верхъ の単数所格。(22) i 語幹動詞 сѣдѣти の現在 3 人称単数。(23) 硬変化形容詞 великъ の男性単数主格長語尾。格語尾が縮化している (-ы < -ыи)。(24) = как бы。(25) o 語幹男性硬変化名詞 доспехъ 「甲冑」の単数所格。(26) 硬変化形容詞 сороцинский (= сарацинский) の男性単数所格長語尾。(27) a 語幹女性硬変化名詞 рука の単数所格。(28) 硬変化形容詞 златъ, великъ の中性単数主格短語尾。古文では短語尾が修飾として用いられる。(29) въ の誤記。(30) o 語幹中性硬変化名詞 яблоко の単数所格。(31) 再帰代名詞生格。(32) простерти の能動過去分詞男性単数主格。(33) en 語幹男性名詞 полдень 「南」の単数所格。(34) 無テーマ動詞 быти の現在 3 人称複数。脚注 70 参照。(35) 指示代名詞 инъ の男性複数主格長語尾。(36) o 語幹男性硬変化名詞 столп (= столб) の複数主格。(37) 硬変化形容詞 многъ の男性複数主格短語尾。(38) en 語幹男性名詞 камы の単数生格。本来の形は камене であるが、しばしば与格の形で現れる。(39) o 語幹中性軟変化名詞 писание の単数生格。(40) ū 語幹男性名詞 верхъ の単数生格であるが、本来の верху ではなく o 語幹名詞の語尾が用いられている (cf. 現露 сверху)。(41) o 語幹男性硬変化名詞 долъ の単数生格であるが、本来の дола ではなく ū 語幹名詞の

²² 本来の形は полудньне であるが、子音語幹名詞は o 語幹・i 語幹名詞の格変化の影響を受けやすい。

²³ 現露の形容詞長語尾複数主格・対格の -ые は男性複数対格・女性複数主格・同対格の *-yję に由来する (h³ < *ę)。古文では本来の鼻母音 а (/ę/) が я と転写されることが多く、1918 年の文字改革までは形容詞女性・中性複数主格・同対格が -ыя と区別されていた。

²⁴ 複数語尾 -овс は単音節の名詞で頻繁に用いられるが、元来は ū 語幹男性名詞の語尾である。

²⁵ 現露の形容詞短語尾複数主格・対格の -ы は男性複数対格・女性複数主格・同対格の *-y に由来する。本文の語尾 -и² は二重母音 *-oi に由来し、脚注 18 の場合と同様に第 2 硬口蓋化が生じる (-zi < *-goi)。

²⁶ 現露の н- で始まる人称代名詞は前置詞 в/к/с がかつて *vŭn/kŭn/sŭn のように *n で終わっていたことによるが (с ним < съ нимъ < *sŭ-n-imŭ)、後に一般化し他の前置詞でも用いられる。

²⁷ = писанія。 -ия を -иа と記すことには中世以降の南スラヴの文献の影響、いわゆる第 2 次南スラヴの影響が色濃く現れている。詳しくは脚注 107 参照。

²⁸ врѣхъ はかつて *vrĥŭs のように語幹が成節の流音から成り立っていたと考えられ、古教スでは врѣхъ と綴られる。このような表記の違いがある上、古東スでは早い段階で流音の前の弱母音が完全母音化を果たしたため (現露 верх)、本文の врѣха のように綴りに混乱が見られる。

²⁹ 現露でいう возьмёт < взять にあたり、現在形の活用は принять に準ずる (иму, имеши, иметь...)。ここでは братъ, пересиливать, портить の意味で用いられており (cf. Срезневский. Т. 3. С. 1670)、Дмитриев (1999, с. 31) は「железо камня того не берет」として、Majeska (1984, p. 28) は「[For example,] iron cannot [cut] this stone」として訳出している。

語尾が用いられている (cf. 現字 здолу)。 (42) je 語幹動詞 писати の受動過去分詞中性単数主格短語尾。 (43) i 語幹女性名詞 рыть 「彫塑」の単数造格。 (44) e 語幹動詞 яти の現在 3 人称単数。

【訳 2】 ここには厚み・高さ・美しさが格別に際立つ柱が立っており、海の遠くからでも見える。その上にはユスティアヌス 1 世が馬に乗っており、大層立派である。まるで生きているかのようであり、サラセンの甲冑を身に纏っては、見るにも恐れ多い。手には大きな金の林檎があり、林檎には十字架があり、右手は自ら勇ましく南方サラセンの地のエルサレムに差し向けられている。他にも多くの大理石の柱が街中に立っており、上から下まで沢山の文字が大きく刻まれている。驚嘆抑えるべくもなく、理性では表現することは不可能である。鉄でさえも、この石材に勝ることはない。

[3] А от того столпа Устинианова внити⁽⁴⁵⁾³⁰ въ двери святыя⁽⁴⁶⁾³¹ Софии в первыя⁽⁴⁷⁾³² двери, поступивъ⁽⁴⁸⁾³³ мало — въ другия, и 3-е, и 4-е, и 5-е, и в шестые, тож⁽⁴⁹⁾ в седмые двери внити въ святую Софью⁽⁵⁰⁾, великую церковь⁽⁵¹⁾³⁴. И, пошед⁽⁵²⁾ мало, обратитися на западь и възрѣти⁽⁵³⁾ горѣ⁽⁵⁴⁾ на двери: ту стоит икона святы Спасъ⁽⁵⁵⁾. О той иконѣ рѣчь в книгах пишется, того мы не можем исписати. Ту бо⁽⁵⁶⁾ поганы иконоборец лѣствицу⁽⁵⁷⁾ пристави⁽⁵⁸⁾ въсьхотѣ⁽⁵⁹⁾ съдрати вѣнецъ златый, и святая Феодосия³⁵ опроверже⁽⁶⁰⁾ лѣствицу и разбѣ⁽⁶¹⁾ поганина⁽⁶²⁾, и ту святую заклаша⁽⁶³⁾³⁶ рогом козым⁽⁶⁴⁾.

³⁰ 本文の внити は接頭辞 в の本来の形を反映しており、*vŭn + *iti (вънити) に由来する。現露の войти は *n の脱落と弱母音の完全母音化 (vo- < *vŭ(n)) が反映された 2 次的な形である。

³¹ 現露の形容詞女性単数の格変化は主格・対格を除く斜格が全て -ой に統一されているが、かつては生格 свят-ья (сват-ья), 与格と所格 свят-ѣи, 造格 свят-ою (сват-ою) のような区別があった。現代語ではウクライナ語で生格 свят-ої, 与格と前置格 свят-ій, 造格 свят-ою の形で残っている。

³² 本文の первыя は古教スでいう пръвыя に対応し、/ѣ/ が я と通例に則って転写されているが、東スラヴ語では語尾の *ѣ が一部 -ѣ³ に転じている (現露でいう первые)。文中の шестые と седмые は後者の形に倣っている。脚注 23 参照。

³³ 本来の形は поступль。能動過去分詞の形成には接辞 *ŭs- が用いられるが (*-ŭ(š)- < *-ŭs-(j)- < PIE *-wos; cf. 羅 gnāvus < gnōscō), i 語幹動詞では幹母音が前舌であるため、*-Cŭ-i(š)- に転じ、語幹末子音がヨット化を被る (поступль < *postŭpŭ-i(š)- < *postŭpŭ-iŭs-j-)。本文の形は a 不定語幹動詞の影響である (читавъ < *čita-vŭ(s)-(j)-)。

³⁴ 現露の単数主格 церковь は対格の転用であり、i 語幹名詞として再分析されている。本来の単数主格形は церкы < църкы < *cŭrk-ŭ であり、斜格で長いテーマ母音 *-ŭ- が短母音とソナントの組み合わせ *-ŭv- (< *-ŭŭ- < *-ŭ-) に置き換わる (単数対格 церковь < църкъвъ < *cŭrk-ŭv-ŭ)。

³⁵ コンスタンティノーブルのフェオドシア (Феодосия Константинопольская) は修道女であり、本文にも現れる 8 世紀の偶像破壊運動 (イコノクラスム) に反抗した逸話が有名である。

³⁶ 本文の заклати と現露の заколоть は母音重挿・非母音重挿のペアである (< *zakolti)。

【注 3】(45)= войти。(46) 硬変化形容詞 *святыи* の女性単数生格長語尾。(47) 序数詞 *первыи* の女性複数対格長語尾。(48) *i* 語幹動詞 *поступити* の能動過去分詞男性単数主格短語尾。(49)= тоже。(50)= Софию/Софью。既出の与格に影響を受けた形か。(51) *ŭv* 語幹女性名詞 *церкы* の単数対格。(52) *e* 語幹動詞 *пonti* の能動過去分詞男性単数主格短語尾。(53)= воззреть。(54)= вверх。(55) *святы* Спас と *икона* が同格で主格になっている。(56)= ведь。(57) *a* 語幹女性軟変化名詞 *лѣствица* (= *лестница*) の単数対格。(58) *i* 語幹動詞 *приставити* のアオリスト 3 人称単数。(59) *je/i* 語幹動詞 *восхотѣти* のアオリスト 3 人称単数。(60) *ne* 語幹動詞 *опровергнути* のアオリスト 3 人称単数。第 1 硬口蓋化を伴う ([ž] < *g)。(61) *je* 語幹動詞 *разбити* のアオリスト 3 人称単数。*разз-*は誤記か。(62) *o* 語幹男性硬変化名詞 *поганин* (= *поганец*) の単数対格。(63) *je* 語幹動詞 *заклати* 「刺し殺す」のアオリスト 3 人称複数。不定人称文のように用いられている。(64) 物主形容詞 *козии* (< *коза*) の男性単数造格長語尾。

【訳 3】ユスティアヌスの柱から聖ソフィア聖堂の扉に入り、1 番目の扉を通る。少し進むと 2 番目が、そして 3 番目、4 番目、5 番目、また 6 番目、更に 7 番目を通り、偉大なる教会である聖ソフィア聖堂の中に至る。少し進み、西側に向かって扉の上の方を見ると、聖なる救世主のイコンが置かれている。このイコンに関しては、割愛せざるを得ないが、多くの書物で記されている。異教の聖像破壊者が梯を立てかけ、黄金の花冠を剥ごうとしたが、聖フェオドスィアが梯を覆し、異教徒を滅ぼした。聖人は山羊の角で刺し殺された。

[4] И отголе⁽⁶⁵⁾ мало пошед, видѣхомъ⁽⁶⁶⁾³⁷ множество народа, цѣлующе⁽⁶⁷⁾ Страсти Господни, и възрадовахомся⁽⁶⁸⁾ велми, зане⁽⁶⁹⁾ бо без слезъ не мощно⁽⁷⁰⁾³⁸ приити къ Страстемъ⁽⁷¹⁾³⁹ Господнимъ. И ту видѣ⁽⁷²⁾ нас царевъ боляринъ⁽⁷³⁾⁴⁰, ему⁽⁷⁴⁾ же имя протостратаръ⁴¹, и

³⁷ 本文の *видѣхомъ* は、いわゆるシグマ・アオリストのうち、RUKI の法則 (*r, *u, *k, *i の後ろに来る *s の音価が変わる) で *x < *s を経た形である (*viděxomŭ* < **vidě-s-o-mos*)。類推の影響で *x が本来発生しない箇所でも生じる (cf. *бихъ* < **bī-s-o-m*)。

³⁸ 古文で「可能である」の副詞としては *можно* (мошно) ならびに *мочно*/мошно/мошно が挙げられる。前者は動詞 *мочь* と同根の **mog-* に接辞 **-in-* が加わって語幹末子音が第一硬口蓋化 (*ž < *g) を経たのに対し、後者は **mog-* の派生名詞 **mogti* 「力」の語幹に接辞 **-in-* が加わっており (**mog-t-in-*)、ヨット化を経ている (古東ス-č-/ 古教ス-št-/ 波-c- < **-gt-*)。本文の *мощно* は古教スで現れる語形であり、ポーランドの影響を被った西部の文献では *моцно* が見られる (現字 *міцний*)。

³⁹ 本来の形は *страстѣмъ* であるが、「強い弱母音」の完全母音化と「弱い弱母音」の脱落が反映されている (*страстемъ* < *страстѣмъ* < **strastimŭ*)。

⁴⁰ 古教ス *боляринъ* と古東ス *бояринъ* に見られる -л- の有無の対応に関して詳細は不明である。

⁴¹ *прѣтострѣторъ* (*prōtostrātōr*) 「馬丁長」はパレオロゴス王朝期 (1261 年~1453 年) のビザンティン最高位の公職の 1 つであり、儀式に関する職務や部隊の指揮を担当した (cf. ODB, Volume 3, p. 1748-1749)。

допрывади⁽⁷⁵⁾ ны до Страстей Господних, Бога ради, и цѣловахомъ⁽⁷⁶⁾, грѣшнии⁽⁷⁷⁾. По той же сторонѣ, поступивше⁽⁷⁸⁾ мало, ту на стѣнѣ Спасѣ, мусеею⁽⁷⁹⁾ утворень⁽⁸⁰⁾, и вода святая от язвъ гвоздинных от ногу⁽⁸¹⁾ его идет, и ту цѣловахом; и помазаша⁽⁸²⁾ ны масломъ и напои⁽⁸³⁾⁴² водою святою. И ту стоять столпове от камени красного мрамора, оковани⁽⁸⁴⁾ чюдно, в них же⁴³ лежать мощи⁽⁸⁵⁾ святых. Ту люди прикасаются, идѣже⁽⁸⁶⁾ кого⁴⁵ болить, здравие⁴⁶ приемлют⁽⁸⁷⁾⁴⁷. И ту видѣ нас святой патриарх Царяграда⁽⁸⁸⁾, ему же имя — Исидоръ⁴⁸, и цѣловахом в руку его, понеже⁽⁸⁹⁾ бо велми любить Русь. О великое чудо смирения святых! Не наш обычай имѣють.

【注 4】(65) = оттуда。(66) i 語幹動詞 видѣти のアオリスト 1 人称複数。(67) je 語幹動詞 цѣловати の能動現在分詞男性複数主格短語尾。語尾については脚注 51 参照。(68) je 語幹動詞 возрадоваться のアオリスト 1 人称複数。(69) = так как。(70) = можно。(71) i 語幹女性名詞 страсть の複数与格。(72) i 語幹動詞 видѣти のアオリスト 3 人称単数。(73) = боярин。(74) 現代語なら生格で現れるような箇所だが、いわゆる「所有の与格」が用いられている。(75) i 語幹動詞 допрывадити (= препроводить) のアオリスト 3 人称単数。(76) je 語幹動詞 цѣловати のアオリスト 1 人称複数。(77) 硬変化形容詞 грѣшнь の男性複数主格長語尾。(78) i 語幹動詞 поступити の能動過去分詞男性複数主格短語尾。本来の形は поступыше。脚注 33 参照。(79) a 語幹女性軟変化名詞 мусѣя (= мусия) 「モザイク」の単数造格。(80) i 語幹動詞 утворити の受動過去分詞男性単数主格短語尾。(81) a 語幹女性硬変化名詞 нога の双数生格。(82) je 語幹動詞 помазати のアオリスト 3 人称複数。(83) i 語幹動詞 напоити のアオリスト 3 人称単数。(84) je 語幹動詞 оковати の受動過去分詞男性複数主格短語尾。(85) 「聖遺物」で絶対複数。古教スの語形である。脚注 38 参照。(86) = где。(87) je 語幹動詞

42 不定人称的に用いられている помазаша に続くことから、本来はアオリスト 3 人称複数の напоиша となるべき箇所である。

43 古文では「人称代名詞+же」という分析的な形が関係代名詞として用いられており、ここでは столпове が先行詞となっている。

44 もとは иде であり、指示代名詞 *ji に現露 где, здесь, везде で現れる *de が加わった形。

45 кого は対格として不定的に用いられており、болѣти は Зѣло мя глава болить のように対格補語を取り得る (СРЯ XI-XVII. Т. 1. С. 281)。故に本文の болить の事実上の主語は関係副詞の идѣже であり、прикасаются で「触る場所」に係る。直訳すれば「ここで人々は〔各自にとって痛い体の場所で〕(聖遺物を)触り、健康を得る」となる。

46 現露でいう здоровье に相当し、母音重挿・非母音重挿のペアである (<*südorvije)。脚注 79 参照。

47 現露の принимают は внять や снять との類推から -н- が語幹末に挿入されている他、現在語幹と不定語幹が一致している。本来は不定語幹が *pri-im-a- (<*pri-im-a-ti)、現在語幹が *pri-j-em-lj- (<*pri-j-emlj-e-ti <*pri-em-e-) であり、語根でゼロ階梯と e 階梯 (im- <*jim- <*im- <*m- // jem- <*em- [<*h₁em-]) の対立、ならびに語幹末母音で a とゼロの対立 (priim-a-ti // prijem-ø-lj-ø) が表れている。

48 イシドル 1 世は 1347 年から 1349 年まで在位したコンスタンティノーブル総主教。

принимати の現在 3 人称複数。(88) о 語幹男性軟変化名詞 царь と о 語幹男性硬変化名詞 градъ の単数生格が合わさった形。(89) = поскольку。

【訳 4】そこから少し歩くと、主の受難の聖遺物に接吻する多くの民を目にし、大いに我々は喜んだ。というのも涙なしには、主の受難を拝められない。ここで馬丁長という位を持つ、皇帝に仕える貴族が我々に会いに来て、我々を主の受難の聖遺物まで案内し、神の恩寵により、罪深き我々は接吻した。同じ側を少し進むと、壁に救世主がモザイクで形作られており、聖水が足の釘による傷から流れており、我々はこれに接吻し、聖油と聖水で清められた。ここには美しい大理石の柱が立っており、見事な装飾が為されており、そこに聖人の不朽体が納められている。人々が痛む部位でここに触れると、健康を得る。ここでコンスタンティノーブル総主教のイシドルが会いに来て、我々は彼の手に接吻した。というのも彼はルーシに好意を抱いているからだ。聖人の謙遜は何とも素晴らしいこと！我々とは異なる習慣を持っているようだ。

[5] Отголѣ идохомъ⁽⁹⁰⁾ къ святому Арсению патриарху⁴⁹ и цѣловахомъ⁽⁹¹⁾ тѣло его, и помаза⁽⁹²⁾ ны старецъ маслом его. И то все идет посолнь⁵⁰ въ церкви⁽⁹³⁾ той.

【注 5】(90) е 語幹動詞 ити のアオリスト 1 人称複数。(91) је 語幹動詞 цѣловати のアオリスト 1 人称複数。(92) је 語幹動詞 помазати のアオリスト 3 人称単数。(93) ѹв 語幹女性名詞 церкви の単数所格。本来の形は църкъве。脚注 22 参照。

【訳 5】そこから我々はアルセーニ総主教のもとに行き、総主教のご遺体に接吻した。そして老修道僧が我々に総主教の聖油を塗った。こうした所作は全て、教会の中で太陽の向きに従って行われる。

⁴⁹ アルセニオスは 13 世紀のコンスタンティノーブル総主教であり、ラテン帝国からコンスタンティノーブルを奪還し帝位に就いたミカエル 8 世パレオロゴスと激しく対立したことで知られる。

⁵⁰ 現露でいう посолонь であり по- + солнце に相当する。形態的には посълнь が本来の形である (солнце < сълнце < *sŭlnŭ + *-ice)。東スラヴ語では流音の前の弱母音は規則的に完全母音化を果たし (первый < първь, столб < стълбъ)、本文の形はこれが反映される。現露の形は流音の後にも完全母音が挿入される、通常の母音重挿と似た第 2 母音重挿 (второе полногласие) が現れている (верёвка < вѣрвь? < вѣрвь)。

[6] И оттолѣ пошедше⁽⁹⁴⁾⁵¹ въ двери из церкви⁽⁹⁵⁾, итти⁵² промеж⁽⁹⁶⁾ стѣнь со свѣщею⁽⁹⁷⁾⁵³, обходя⁽⁹⁸⁾⁵⁴ акы⁽⁹⁹⁾ кругомъ.

【注 6】(94) е 語幹動詞 поити の能動過去分詞男性複数主格短語尾。(95) ѿ 語幹女性名詞 церкы の単数生格。本来の形は църкъве。脚注 22 参照。(96)= между。原則生格支配。(97) а 語幹女性軟変化名詞 свѣща の単数造格。(98) і 語幹動詞 обходити の能動現在分詞男性単数主格短語尾。(99)= как。

【訳 6】そこから我々は扉を通して教会から出て、壁の間を蠟燭を持って進み、円を描くように回った。

[7] Тамо же стоить икона святы Спасъ велми чюдна, и то зовется⁽¹⁰⁰⁾⁵⁵ Елеоня гора, по подобию, якоже⁽¹⁰¹⁾ и въ Иерусалимѣ⁵⁶. Оттоле, пошед къ олтарю⁽¹⁰²⁾⁵⁷, стоять столпи велми красны⁽¹⁰³⁾, подобни аспиду⁽¹⁰⁴⁾⁵⁸; ту же есть в великомъ олтарѣ колодяз⁽¹⁰⁵⁾, от святого

51 この文では述語動詞が欠落しており、過去分詞・不定形・現在分詞で構成されている。本来であれば該当箇所が идохомъ にでもなる筈であるが、古文では分詞が多用される結果、文が分詞だけで成立している場合が多くある。なお能動現在分詞・能動過去分詞の格変化は軟変化形容詞に準ずるが、女性単数主格は несущи[я], несъши[я] と形が異なり、男性複数主格も несущи[и], несъши[и] と並んで несуще[и], несъше[и] が用いられることがある。

52 本来の形は ити であり、現露の идти と本文の итти は現在語幹 ид- に影響されたものである (пойти)。もとは無テーマ動詞 *ei- であったと考えられ (羅 eo, is, it...; 希 εἶμι (eimi), εἶς (eis), εἶσι (eisi)...), スラヴ語の現在語幹は接辞 *-d- が加わった形である。この接辞は *-d^h- に由来し、諸説あるが、印欧祖語の命令法 2 人称単数の活用語尾 -d^hi (希 ἴθι (ithi)) ないしギリシア語のアオリスト受動相 (ἐπέμφθην (epémphthēn) < πέμπω (pémphō) 「送る」) との関連が考えられる (cf. Derksen, p.216; ЭССЯ. Т. 8. С. 247–248)。

53 語源的には *světŭ + *-ja であるため、ヨット化が生じるが、脚注 38 の *mog-t-in- の例と同様に語群によって結果が異なる (現露 свеча, 波 świeca, BCMS sveća)。

54 пошедше が複数であるため、本来は обходяще となるべき箇所である。この例のように能動分詞の男性単数主格短語尾が副詞的用法で広く用いられるようになった結果、現露では形動詞と副動詞が形と用法の上で個別の範疇として成立することとなる。つまり本来の能動分詞短語尾 читаю, читаю が副詞的用法で全般的に使われるようになった結果、副動詞という新たな不変法の文法カテゴリーとして成立する。形容詞的用法では читаю, читаю に代わって新たな男性単数主格長語尾 читающий, читавший が斜格からの類推で補充され、別個の形動詞として確立するに至った。

55 現露では зовётся であるが、前舌母音 e から後舌母音 o/ɐ の変化は東スラヴ語で不均一に生じる (字 чорний / 露 чёрный < чернь < 古東ス чьрънь ただし 字 чотири / 露 четыре; 字 даеш / 露 даёшь)。ロシア語では原則として、アクセントのある音節で本来の軟子音の後ならびに硬子音の前で起きるが、他に細かい条件が多々ある (cf. Блатна, 1985)。

56 エルサレムのオリーブ山は、イエスが捕らえられる前の最後の夜を過ごしたとされる場所。

57 羅 altäre に由来する、東スラヴ語のいわゆる оканье の形であり、語頭で o < a が起きる。現代ではウクライナ語に多く残る (字 Олександр, 露 Александр < Ἀλέξανδρος (Aléxandros))。

58 希 ἀσπίς (aspís) 「盾」に由来し、英 asp のような「毒蛇」の意味は頭の形による。

Иердана⁽¹⁰⁶⁾ явися⁽¹⁰⁷⁾. Стражи бо церковнии выныша⁽¹⁰⁸⁾ изъ кладязя⁵⁹ пахирь⁽¹⁰⁹⁾⁶⁰, и⁽¹¹⁰⁾⁶¹ познаша⁽¹¹¹⁾ калики рускыя, Греци же не яша⁽¹¹²⁾ вѣры⁶², русь же рѣша⁽¹¹³⁾⁶³: «Нашь⁶⁴ пахирь есть, — мы купахомся⁽¹¹⁴⁾ и изренихом⁽¹¹⁵⁾ на Иерданѣ, а во днѣ его злато⁶⁵ запечатано⁽¹¹⁶⁾». И разбивше⁽¹¹⁷⁾ ставецъ и обрѣтоша⁽¹¹⁸⁾ ⁶⁶ злато, и много дивишася⁽¹¹⁹⁾, се⁽¹²⁰⁾ бо чудо сътворися⁽¹²¹⁾⁶⁷ Божиим повелѣниемъ, то ся нарече⁽¹²²⁾⁶⁸ «Иерданъ».

【注 7】(100) е 語幹動詞 зватися の現在 3 人称単数。(101) = точно как。(102) о 語幹男性軟変化名詞 олтарь (= алтарь) の単数与格。(103) 硬変化形容詞 краснь 「美しい」の男性複数主格短語尾。本来は красни となるべき箇所。脚注 25 参照。(104) о 語幹男性硬変化名詞 аспидь 「碧玉」の単数与格。(105) = колодец。(106) = Иордана。(107) i 語幹動詞 явиться の

⁵⁹ 前文に出る колодязь と母音重挿・非母音重挿の関係にある (< *koldędzi)。

⁶⁰ пахирь は Срезневский. Т. 2. С. 891 ならびに СРЯ XI–XVII Т. 14. С. 176 で用例が本文のみであり、前者は語義を不詳としている。СДРЯ Т. 6. С. 361 では 14 世紀の寺法類篇 (Кормчая Варсонофиевская) から用例が採用されている。他の写本では чаша が現れ、本文と同様に ставецъ と置き換えられることから、何らかの器を指すようであるが、何れにせよ非常に稀な語である。Фасмер. Т. 3. С. 221 は勃 пахар 「深皿」ならびに ВСМС pehar 「ゴブレット」を挙げており、これらはゲルマン語経由のラテン語である (英 beaker, 独 Becher < 古高独 behari < 羅 bicarium, cf. EtymWb)。他方でデュルク語では *bakir 「銅」に由来する語が容器の意味で用いられる場合があるが (ウズベク語 paqir 「バケツ」)、тюркизм である指摘は見受けられない。

⁶¹ 人称代名詞 3 人称の対格は、古く単音節であり、男性 3 人称単数は и、中性は е、女性 ю などと綴られる。現露の его と еѣ は生格形からの補充である。なおかつては主格も *и, *е, *я であったと考えられるが、これらは古教スでも単独に用いられることはなく、関係代名詞の形で現れる (иже, еже, яже)。現露の он, оно, она はもと遠称の指示代名詞であり、人称代名詞に補充された。

⁶² яти вѣру は「信じる」の意味で頻繁に用いられる表現である。なお古文では原則、否定文で直接目的語が否定生格をとり、現露の否定における対格補語と生格補語の差異は後代のものである。

⁶³ 特殊なシグマ・アオリストの形である。речи ないし реши の語根は *rek- (реку, речеши...) であるが、語末子音 *k の脱落による代償延長の他、類推による *-x- < *-s- が起きている (古教ス рѣша (rěšę); *рѣса (rěšę) < *rē-s-in < *rek-s-in < *rek-s-int)。脚注 37 参照。

⁶⁴ 現露では наш のように ш が ж などと並んで硬化するが、古語における硬性・軟性の音韻構造は大きく異なり、この場合は нашь の綴りが一般的である (naši < *nas + *-ji)。

⁶⁵ 現露でいう золото に相当し、母音重挿・非母音重挿のペアである (< *zolto, cf. 英 gold)。

⁶⁶ 現露 обрести (обрету, обретѣшь) はかつて活用が複雑であり、不定形が обрѣсти であるのに対して現在形は古教ス обращж, обращеши... である。現在語幹の鼻母音はいわゆる nasal infix に由来し (*obrēt-ti / *obrēt-ję < *obrē(n)t-)、現在形の形成で *n が挿入される場合がある (英 stand / stood, 古東ス лагж / лечи)。不定形の -сти は異化による (現露 вести < вед- + -ти)。なお обрѣтоша はシグマ・アオリストのうち、接辞 *-os- が用いられる非常に生産的な形である (1 人称単数 *обрѣт(оx)ъ)。

⁶⁷ сътворити は「為す」の意味で古教スから広く使われる動詞であり、съ- + творити に由来する。現露では сотворить が творить の完了体のペアとして残る一方で、створить という二重語も「閉める・合わせる」の意味で用いられるが、これは後代の派生と考えられる。

⁶⁸ 現露では называется のように再帰代名詞 ся は動詞に後続して綴られるが、古文では助詞 же, бо や人称代名詞 ми, ти などと共に前接語 (enclitic) として文の第 2 位に置かれることが多い。ВСМС などでは定着している文法事項である (Jučer smo se slučajno na ulici vidjeli = Yesterday, we have seen each other by chance on the street)。

アオリスト 3 人称単数。(108) е 語幹動詞 выняти のアオリスト 3 人称複数。(109) = сосуд, чаша。(110) 接続詞 и ないし人称代名詞 3 人称男性単数対格。(111) je 語幹動詞 познати のアオリスト 3 人称複数。(112) е 語幹動詞 яти のアオリスト 3 人称複数。(113) е 語幹動詞 речи のアオリスト 3 人称複数。(114) je 語幹動詞 купатися のアオリスト 1 人称複数。(115) i 語幹動詞 изронити 「落とす」のアオリスト 1 人称複数。(116) je 語幹動詞 запечатати の受動分詞過去中性単数主格。(117) je 語幹動詞 разбити の能動分詞過去男性複数主格。(118) je 語幹動詞 обръсти (= найти) のアオリスト 3 人称複数。(119) i 語幹動詞 дивитися のアオリスト 3 人称複数。(120) 指示代名詞 съ (= сей, этот) の中性単数主格。(121) i 語幹動詞 сотворитися のアオリスト 3 人称単数。(122) е 語幹動詞 наречися 「呼ばれる」のアオリスト 3 人称単数。

【訳 7】そこには救世主の大層立派なアイコンがあり、エルサレムのものと同様にオリブ山と呼ばれる。そこから祭壇に向かうと、碧玉で出来ているかのようなとても美しい柱が立っている。この立派な祭壇には、聖なるヨルダン川の水で満ちた井戸がある。教会の見張りたちが井戸の中に器を見つけ、ルーシの巡礼者たちはそれを「自分たちのものと」認識した。ギリシア人はこれを信じず、ルーシ人は言った。「これは我々の器である。我々がヨルダン川で水浴びをしている最中に落としたものだ。その底には金が隠されているのだ。」ギリシア人は、ルーシ人がこのように語るのを信じなかった。器を壊し、金が見つかり、[ギリシア人は] 大いに驚いた。この奇蹟は神の命により起き、その井戸は「ヨルダン」と呼ばれている。

[16] От подрумия⁽¹²³⁾ поити мимо Кандосками⁶⁹, туто суть⁽¹²⁴⁾⁷⁰ врата⁽¹²⁵⁾⁷¹ городная⁽¹²⁶⁾⁷² желѣзна⁽¹²⁷⁾ решедчата⁽¹²⁸⁾, велика велми; тѣми бо враты⁽¹²⁹⁾⁷³ море введено⁽¹³⁰⁾ внутрь города.

⁶⁹ Кандоскамия は、マルマラ海に面したコンスタンティノープルの軍港。

⁷⁰ 現露と異なり古文で быти は基本的に省略されない。また быти は вѣдѣти, дати, ѣсти, имѣти と共にスラヴ語に残る印欧祖語由来の無テーマ動詞である。テーマ動詞とは異なる人称語尾が用いられ、語根に直接続くことから、複雑な音変化が起きる（現在形 есмь (< *es-mī), еси (< *e(s)-si), есть (< *es-tī), есмъ (< *es-mos), есте (< *es-te), суть (< *[e]s-[o]nt?))。cf. 希 εἰμί (eimí), εἶ (eí), ἐστί (estí), ἐσμέν (esmén), ἐστέ (esté), εἰσὶ (eisi) [一部*-s-脱落]；羅 sum, es, est, sumus, estis, sunt [一部*-e-脱落]。なお быти は英語の be (he is / he was) と同様に複数の動詞に由来する、複数の語幹を持つ動詞である (быти/буду/был/буду < *buH-, есть/сый < *h₁es-)。

⁷¹ 現露の ворота と本文の врата は母音重挿・非母音重挿の関係にある。スラヴ祖語 *vorta は中性複数名詞として再建され、バルト語でも複数形が用いられる（リトアニア語 vartai など）。ブルガリア語ならびにマケドニア語では女性単数名詞として再分析されている（стъклена/стаклена врата 「ガラス扉」）。

⁷² 現露では形容詞複数の格変化が男性・女性・中性を通じて統合されているが、古文ならびに一部の現代語では単語尾 нови/новы/нова、長語尾 новии/новыя/новая のように弁別されている。

⁷³ o 語幹名詞は現露の第 1 変化名詞に発展するが、その過程で ū 語幹名詞と a 語幹名詞の格変化に影響を受ける。特に複数では生格形の -ов が ū 語幹名詞に由来し (cf. 複生 городъ (< *gord-o-om) vs.

И коли⁽¹³¹⁾ бываеть рать⁽¹³²⁾ с моря, и ту держат корабли и катарги⁽¹³³⁾, до треюсоты⁽¹³⁴⁾⁷⁴. Имъет же катарга весль⁽¹³⁵⁾⁷⁵ 200, а иная 300 весел, в тѣх судех⁽¹³⁶⁾⁷⁶ по морю рать ходить. А оже⁽¹³⁷⁾ будет⁷⁷ вѣтръ, а они бѣжат и гонят⁽¹³⁸⁾⁷⁸, а корабль стоит — погодия⁽¹³⁹⁾⁷⁹ ждеть⁸⁰.

【注 16】(123) о 語幹中性軟変化名詞 подрумие 「競馬場」の単数生格。cf. 現露 ипподром < иппόδρομος (hippódromos)。 (124) 無テーマ動詞 быти の現在 3 人称複数。 (125) = ворота。 (126) 硬変化形容詞 городнь の中性複数主格長語尾。 (127) 硬変化形容詞 желъзынь の中性複数主格短語尾。 (128) = решётчатые。 (129) о 語幹通複中性硬変化名詞 врата の造格。 (130) е 語幹動詞 ввести の受動分詞過去中性単数主格短語尾。 (131) = если, когда。 (132) ここでは「軍勢」。 (133) = катарги 「ガレー船」 (134) 数詞 триста の生格。 (135) о 語幹中性硬変化

сыновъ (< *syn-ow-om))、与格・造格・前置格は а 語幹名詞の格語尾が転用されている (cf. 複与 городомъ (< *gord-o-mus) vs. росамъ (< *ros-a-mus); 複造 города vs. росами; 複所 городѣхъ vs. росахъ)。 ⁷⁴ 現露 триста などの数詞は「100 が 3 つ」のように語が形成される。古文では原則、数詞が 1-4 の場合は結びつく名詞の数格が一致し (одиномъ городѣ, двѣ уши, три богиня, четыре домове)、5 以上の数詞は名詞扱いで複数生格をとる (пять городѣ)。одинъ の格変化は代名詞硬変化単数、два と оба は代名詞硬変化双数、три は i 語幹名詞複数、четыре は子音語幹名詞複数、пять 以上は i 語幹女性名詞単数に準ずる。故に本文の треюсот は трысоты/трисоты か代名詞複数の影響を受けた трыхъсоты (現露 трѣхсот) になりそうだが、200 の生格形 (двоюсту) の影響を受けている。なお現露では数詞と名詞の結びつきが再編し、統語の面で [2+双数] は [2+単数生格] に再分析され、3 と 4 にまで拡大した一方、形態では два にまで格変化が代名詞複数に倣っている。

⁷⁵ весло は語幹に弱母音を含まず、本来の複数生格形は весль である。本文で続く весел は現露でも用いられるが、ここで見られる -e は弱母音の完全母音化で生ずる本来の出没母音から受けた類推の影響である (окно < окъно < *okŭno / окон < окънь < *okŭnŭ)。

⁷⁶ 現露 суд 「裁判」と сосуд 「器」ならびに судно 「船」は同語源と見做されており (Фасмер. Т. 3. С. 794 など)、実際に古教スでも сѣдъ は「血管・道具・身体の部分」などの意味で用いられる (Цейтлин. С. 683)。語源に関して論争はあるが、一般的に接頭辞 *som- (cy-) と語根 *deh₁- (現露 дѣть, 英 do) が合わさった *som-dh₁-os として再建され (cf. Черных. Т. 2. С. 216)、意味的な派生が生じたと考えられる (cf. 希 σὺνθήκη (sunthékē) 「語句の結合・協約・棺」)。

⁷⁷ быти は есмь, еси, есть... と буду, будешь, будеть... の 2 つの現在形を有しており、前者は不完了的、後者は完了的に用いられる。現露では後者が быть の未来形かつ不完了体動詞の未来形の助動詞になっているが、古文では原則として不定詞と用いられることはなく、繫辞的な場合は「～し始める (начну, стану)」「～となる (окажется, обнаружится, случится)」といった意味を表す。歴史的な未来時制の変遷については ИГРЯ-2020. С. 21-30 を参照されたい。

⁷⁸ гонити は гнати の多回体であったと考えられるが、更に派生した多回体の *ganjati (露 гонять, 宇 ганяти) が今では多く用いられる。現露では гонитель 「圧迫者、迫害者」に痕跡が残る。

⁷⁹ 特に動名詞の場合、о 語幹中性軟変化名詞の語幹末に「はりつめた弱母音」が接辞 -ij- で頻出する (*pisanije < *pisa-n-ij-e)。母音重挿・非母音重挿のように、古文では「はりつめた弱母音」が完全母音化するかしないかでバリエーションが生じており、現露でも二重語として残るケースが多い。基本的には完全母音化した形が教会語 (славянизм) とされる。cf. воскресение 「復活」/ воскресенье 「日曜日」、житие 「人生・伝記」/ житьё 「暮らし」、здравие / здоровье (脚注 46 参照)。

⁸⁰ 現露の ждать や желать など、期待・願望を表す動詞は対象が限定的であれば対格補語を、抽象的であれば生格補語を一般的にとるが、古文では双方の場合で生格をとる場合が多い。概して、古文では現代に比べて生格の守備範囲が大きい。脚注 62 参照。

名詞 *весло* の複数生格。(136) *о* 語幹男性硬変化名詞 *судь* の複数所格。脚注 73 参照。(137) = *если, когда*。(138) *и* 語幹動詞 *гонити* 「追う」の現在 3 人称複数。(139) *о* 語幹中性軟変化名詞 *погодье* 「良い天気」の単数生格。

【訳 16】競馬場からカンドスカミア港を通り過ぎていくと、鉄製で格子状の、大層大きな市門があり、この門によって海が街の内側とつながっている。そして、海から [敵の] 軍勢が攻めてくる際には、最大 300 隻の軍艦や漕ぎ舟が停泊している。漕ぎ舟には 200 のオールが備わっており、中には 300 ものオールが備わる舟もある。軍勢はそれらの舟で海に繰り出す。[追い] 風が吹いてきたら、漕ぎ舟は急いで進んで [敵を] 追い詰める。軍艦は停泊し、良い天気になるのを待つ。

[17] А оттоле *идо́хом*⁽¹⁴⁰⁾ къ святому *Димитрию*⁽¹⁴¹⁾⁸¹, ту *лежит*⁽¹⁴²⁾⁸² тѣ́ло святаго царя⁽¹⁴³⁾ *Ласкариасафа*⁸³, тако⁽¹⁴⁴⁾ бо *бѣ*⁽¹⁴⁵⁾⁸⁴ имя его, и цѣ́ловахомъ, грѣ́шнии, тѣ́ло его. *Той*⁽¹⁴⁶⁾⁸⁵ *есть*⁸⁶ монастырь *царевъ*⁽¹⁴⁷⁾⁸⁷, стоить при *мори*⁽¹⁴⁸⁾⁸⁸, и ту *есть*⁸⁹ близ монастыря того живет

⁸¹ 現露では *Дмитрий* が一般的であるが、希 Δημήτριος (Dēmétrios) に由来するため、教会語では *Димитрий* が、歴史的人物の呼称では *Деметрий* が用いられる (cf. 指小形 *Дима*)。ギリシア語は中世の時点で音韻体系が古代期から大きく変化しているため (η /ē/ : [ē] > [i] など)、スラヴ語でもギリシア語由来の借用語の表記には揺らぎが生じる (字 *εφῖρ* / *εφερ* < αἰθήρ [aithér])。

⁸² 文頭の *идо́хом* のように、語末の弱母音は世俗的なし中世以降の文献で脱落しやすく、また実際の写本では省略されることが多い。

⁸³ *Ласкариасаф* は第 4 回十字軍でコンスタンティノープルを追われた東ローマ帝国の貴族が建国したニカイア帝国の皇帝ヨハネス 4 世ラスカリス (1258~1261 年在位) を指すと考えられている (cf. Majeska, 1984, p. 267-268)。

⁸⁴ *быти* のアオリストには完了的な意味で用いられる形 (*быхъ, бы(сть), бы(сть), быхомъ, бысте, быша*) と完了的な意味で用いられる形 (*бѣхъ, бѣ(сть), бѣ(сть), бѣхомъ, бѣсте, бѣша*) がある。ここで用いられる完了の *бѣ* は「(名前がそのようなもので) あった」という過去における状態を、本段落 6 行目の完了の *бысть* は「(街で大いなる泣き声が) 起こった」という状態の移行を表している。

⁸⁵ 現露の指示代名詞 *сей* や *тот* の男性単数主格形は元来 *съ* と *тъ* であったが、前者は接辞 **-ji* が加わったことに、後者は重複に由来する (*тот* < *тътъ*)。ここでは現露 *сей* に倣った *той* が現れている。なお現露で人称代名詞となった遠称の *он* (脚注 61 参照) はそのままの形が引き継がれている (< *онъ* ただし cf. *оный*)。

⁸⁶ 脚注 89 参照。

⁸⁷ 古文の物主形容詞はいくつかのタイプがあるが (脚注 11 参照)、ここでは接辞 **-ov* / **-ev* を加える形が用いられている。現露では所有者としての人物を生格で表すことが一般的であるが、古文ならびに一部の現代語では物主形容詞が使われる。cf. BCMS *Čitam sestrinu knjigu*. 露 Я читаю книгу сестры.

⁸⁸ 現露では名詞の格変化の体系が再編された結果、**-ě* (-*ѣ*) に由来する硬変化の格語尾 *-e* に軟変化も *-e* が対応するが (к стране / к неделе, при месте / при море)、本来は **-ě* (-*ѣ*) / **-i* (-*и*) の対応であった (къ странѣ / къ недѣли, при мѣстѣ / при мори)。

⁸⁹ この文では «*есть монастырь ... стоить при мори ... и ту есть ... живет жидовъ много*» のように、主語 *монастырь* と *жидовъ много* の述語として本動詞 *стоять* と *живет* に加え *есть* が記される。本来は余分と考えられる *есть* や過去形の *бѣ, бѣше* が本動詞と共に書かれる例は、主に北西部の文献で多く

жидовь⁽¹⁴⁹⁾⁹⁰ много при мори, възлѣ⁽¹⁵⁰⁾ городную⁽¹⁵¹⁾ стѣну⁽¹⁵²⁾⁹¹, и врата на море зовутся⁽¹⁵³⁾ Жидовская⁽¹⁵⁴⁾. И ту было⁽¹⁵⁵⁾ 92 знамение: приходилъ⁽¹⁵⁶⁾ 93 Хозрой⁹⁴, царь перскы⁽¹⁵⁷⁾ 95, ратию⁽¹⁵⁸⁾⁹⁶ къ Царюграду⁽¹⁵⁹⁾, и уже хотяше⁽¹⁶⁰⁾⁹⁷ взять град, и бысть⁽¹⁶¹⁾⁹⁸ въ Цариградѣ⁽¹⁶²⁾

見られる。この説明としては、教会スラヴ語において規範的であった助動詞を伴う現在完了と過去完了に影響を受けた過剰修正だとする立場や、現代の北西部にも残る есть, был(-а/-о/-и) を用いた、ある事実の实在性を表す方言的表現 (Ребята есть курят = «есть такие ребята, которые курят») だとする説がある。cf. Шевелева (1993)。

90 本文で既出の верхъ や脚注 73 で扱った сынъ は \dot{y} 語幹名詞であったことが確実視されているが (* $\text{virs}\ddot{u}s < *w\ddot{r}s\ddot{u}s$, * $\text{syn}\ddot{u}s < *s\ddot{u}n\ddot{u}s$)、 \dot{y} 語幹名詞の格変化は早くも古教スの文献から \circ 語幹名詞と混淆しているため、本来的な \dot{y} 語幹名詞と \circ 語幹名詞の分類が困難な場合がある。жидѣ の場合、13 世紀前半ブルガリアのボローニヤ詩篇 (Болонская псалтырь) で複数主格 жидове, 生格 жидовь, 対格 жидовы, 造格 жидьми, 所格 жидохъ/жидовѣхъ のような \dot{y} 語幹名詞に準ずる語形が確認される。cf. Шепкин (1906, с. 214)。故に本文の жидовь は本来的な \dot{y} 語幹名詞の複数生格形とも、 \dot{y} 語幹名詞の影響を受けた \circ 語幹名詞の複数生格形とも解釈することができる。

91 現露で возле は常に生格要求の前置詞であるが、古文では対格要求で現れる場合もある (cf. СРЯ XI-XVII T. 2. С. 291)。故に形の上で当該箇所は「街の壁」が単数対格ないし双数生格をとっていると考えられるが、意味上の問題と双数が早くから通常の用法では廃れていたことから、ここは単数であると考えられる。

92 古東スの現在完了は英語の現在完了と似たように [助動詞 быти の現在形 + 完了分詞-л-] で表された (и ту есть было / and here has been)。現露の過去形は、この現在完了から助動詞が脱落した形に由来するが (и тут было)、かなり早い段階から口語で用いられていた。故に本文献でもアオリストないし本来の現在完了に代わり、完了分詞が単体で用いられる場合が散見される。

93 脚注 92 参照。

94 ササン朝ペルシア帝国の第 21 代君主ホスロー 1 世 (531~579 年在位) はユスティニアヌス 1 世 (527~565 年在位) 治世下の東ローマ帝国と戦い、帝国の再建に尽力した。

95 現露では Персида 「ペルシア」の派生形容詞 персидский が一般的に用いられるが、ここでは перс 「ペルシア人」の派生形容詞が用いられているようである。なお-д-は希 Περίσις (Persís) の斜格形 Περίσιδ- (Persíd-) による。語尾-ы は硬変化形容詞男性単数主格長語尾-ыи が縮約したものである。

96 \dot{y} 語幹女性名詞の単数造格は語尾が * $\text{-}\dot{y}\text{-j}\ddot{q}$ に由来し「はりつめた弱母音」が生じる (* $\text{-}\dot{y}\text{-j}\ddot{q}$)。故に現露の ратью ならびに本文の ратию のようなバリエーションがある。脚注 79 参照。

97 古文の хотѣти は「欲する」の他に「[ある動作に] 近いこと (быть близким к чему-либо)」や「可能である (иметь возможность)」の意味でも用いられ (cf. Срезневский. Т. 3. С. 1390-1392)、希 μέλλω や独 wollen に近いところがある。ここで「街を占領する」ことはホスローの願望というよりも、そのような可能性があったことを示すと考えられ、Дмитриев (1999, с. 37) は «и уже должен был он захватить город» と、Majeska (1984, p. 38) は “and was about to take the city” と訳している。なお хотѣти は未来を表す助動詞として用いられる場合もあり、一部現代語で定着している (BCMS Mi ćemo ovdje živjeti. = We will live here. [ćemo は hoćemo に由来する接語形])。

98 現露の仮定法 (я хотел бы...) に残る быти の完了体アオリスト 3 人称単数 бы は бысть と記されることが多い。同様に他の動詞でも начати のアオリスト 3 人称単数が начать となるように、-ть が加わることがある。

плачь великъ. Тогда прояви⁽¹⁶³⁾ Богъ старцу нѣкоему⁽¹⁶⁴⁾⁹⁹ и рече⁽¹⁶⁵⁾: «Вземше⁽¹⁶⁶⁾¹⁰⁰ поясъ¹⁰¹ святыя Богородица⁽¹⁶⁷⁾¹⁰², и омочите⁽¹⁶⁸⁾ конецъ его в море». И сътвориша⁽¹⁶⁹⁾ тако с пѣниемъ⁽¹⁷⁰⁾ и плачемъ⁽¹⁷¹⁾, и възмутися⁽¹⁷²⁾ море и разби корабля⁽¹⁷³⁾¹⁰³ их о градную стѣну¹⁰⁴. Тоже и нынѣ кости их бѣлѣются⁽¹⁷⁴⁾, аки снѣгъ, при градной стѣнѣ, близ Жидовскихъ вратъ.

【注 17】(140) е 語幹動詞 ити のアオリスト 1 人称複数。(141) о 語幹男性軟変化名詞 Димитрий の単数与格。(142) і 語幹動詞 лежати の現在 3 人称単数。(143) о 語幹男性軟変化名詞 царь の単数生格。(144) 指示代名詞 такъ の中性単数主格。(145) 無テーマ動詞 быти の不完了アオリスト 3 人称単数。(146) 指示代名詞 ть の男性単数主格。(147) 物主形容詞 царевъ の男性単数主格短語尾。(148) о 語幹中性軟変化名詞 море の単数所格。(149) о 語幹男性硬変化名詞ないし ѡ 語幹男性名詞 жидь の複数生格。(150) = возле。(151) 硬変化形容詞 городньѣ の女性単数対格長語尾。(152) а 語幹女性硬変化名詞 стѣна の単数対格。(153) е 語幹動詞 зватися の現在 3 人称複数。(154) 硬変化形容詞 Жидовский の中性複数主格長語尾。(155) 無テーマ動詞 быти の完了分詞中性単数主格ないし現在完了 3 人称中性単数。(156) і 語幹動詞 приходити の完了分詞男性単数主格ないし現在完了 3 人称男性単数。(157) = персидский。(158) і 語幹女性名詞 рать の単数造格。(159) Царь + градъ で о 語幹男性軟変化名詞 царь の単数与格に о 語幹男性硬変化名詞 градъ の単数与格が加わった形。(160) je/i 語幹動詞 хотѣти のインパーフェクト 3 人称単数。(161) 無テーマ動詞 быти の完了アオリスト 3 人称単数。(162) Царь + градъ で о 語幹男性軟変化名詞 царь の単数所格に о 語幹男性硬変化名詞 градъ の単数所格が加わった形。(163) і 語幹動詞 проявити のアオリスト 3 人称単数。(164) 不定代名詞 нѣкий の男性単数与格。(165) е 語幹動詞 речи (= сказать) のア

99 現露では 1918 年の文字改革によって ѡ が е に統合された結果、不定を表す нѣ-と否定を表す не-が筆記上区別されない。例) «У него есть нечто сообщить ей исключительно важное.» 「彼は彼女に伝える非常に大事なことがある」vs. «Мне никому нечего сообщить.» 「私は誰にも何も伝えることがない」

100 взяти など яти (ѣти < *jēti < *jem-ti) に由来する動詞の能動過去分詞の語幹は現在語幹 (иму < *jīm-u) に倣うが、男性・中性単数主格短語尾で接辞-ь、その他で接辞-ьш-が付くため (< *-ūs(j)-)、接辞前の弱母音が強い位置となり、完全母音化する (вземше < възъмше < *vŭz-jīm-ūs-j-es)。

101 ここで現れる「帯」は Пояс Пресвятой Богородицы と呼ばれる、生神女マリアのものとされる聖遺物のことを指すと思われる。

102 現露で ц (/ts/), ж (/ʒ/), ш (/ʃ/) は恒硬子音として扱われるが、これらの音はもともと硬口蓋化によって発生しているため、古語研究では з < s (/z/ < /dz/), ч (/tʃ/) などと共に軟子音に分類される。これらの本来的軟子音で語幹が終わる名詞は基本的に軟変化を起こすため、богородица は а 語幹女性軟変化名詞であり、生格は богородица (< богородица) となる。本文では-ц-を軟性の標識として見なす-ца の綴りが採用されており、たまたま主格と同じ形になっているに過ぎない。脚注 14, 23 参照。

103 о 語幹男性軟変化名詞の複数主格は主格語尾が-и、対格語尾が-а であったが、現露では-и に統合されている。同様に硬変化も-и-ы である。ここでは表記上-а が-я に代わっている。脚注 23 参照。

104 現露で前置詞 о が場所を表す用法は限られるが、古文では頻繁に用いられる。古文における前置詞の用法は中沢 (2011, p.183-201) を参照されたい。

オリスト 3 人称単数。(166) e 語幹動詞 *взяти* の能動過去分詞男性複数主格。(167) a 語幹女性軟変化名詞 *богородица* の単数生格。(168) i 語幹動詞 *омочити* の命令法 2 人称複数。(169) i 語幹動詞 *сотворити* のアオリスト 3 人称複数。(170) o 語幹中性軟変化名詞 *пѣние* の単数造格。(171) o 語幹男性軟変化名詞 *плачь* の単数造格。(172) i 語幹動詞 *возмутитися* のアオリスト 3 人称単数。(173) o 語幹男性軟変化名詞 *корабль* の複数対格。(174) je 語幹動詞 *бѣлѣтися* の現在 3 人称複数。

【訳 17】そこから我々は聖ドミトリー修道院の方へ足を運んだ。そこにはラスカリスという名の、聖人たる皇帝の遺骸が置かれており、罪深き我々は彼の遺骸に接吻した。この修道院は皇帝のものであり、海のそばに建っている。この修道院の近く、街の壁沿いで、海に面した「ユダヤ門」と呼ばれる門の周囲には、多くのユダヤ人が住んでいる。また、そこには次のような奇蹟の逸話がある。ペルシアの皇帝ホスローがコンスタンティノーブルへ進軍し、街を掌握せんとした時、コンスタンティノーブルは深い嘆きに沈んだ。その時、ある老僧の所に神が現れてこう言った。「生神女の帯を取って、その端を海に浸けなさい。」そして聖歌と嘆きと共にそのようにすると、海が渦を巻き、街の壁に彼らの船が叩きつけられた。そして今日も、街の壁のそば、ユダヤ門の近くでは、雪のように彼らの骨が白く風化しているのである。

[18] Таже⁽¹⁷⁵⁾ идохом ко¹⁰⁵ святому Иоанну, въ Студискы⁽¹⁷⁶⁾¹⁰⁶ монастырь, много бо суть ту

¹⁰⁵ 前置詞が末尾に -o を伴うのは本来、強い位置にある弱母音の完全母音化による現象であった (со мною < съ мѣноѹ). しかし現露では во Франции のように弱母音の完全母音化とは関係ないケースで -o を足すことが広まっており、本文の ко святому も同様である (къ святому).

¹⁰⁶ 現露では原則として г, к, х に続いて ы が綴られることはないが、かつて軟口蓋音 *g, *k, *x は前舌母音が続く場合は第 1 硬口蓋化で *z̥, *č, *š に、二重母音 *oi (> ѣ², и²)が続く場合は第 2 硬口蓋化で *dz (> *z), *c, *s に転じているため、古教スならびに古東スの文献で и を含む前舌母音が恒硬子音 г, к, х に続くことは稀であり、むしろ非前舌母音が続く (古教ス гыбнѣти, 古東ス гыбнути, cf. 現露 гибнуть). ロシア語で кы, гы, хы が ки, ги, хи となった理由としては外来語の影響・第 2 硬口蓋化の失効・/y/と /i/の音韻的対立の再編などが挙げられる。詳しくは、佐々木 (1985, 94-95 頁)、原 (1996, 149-162 頁)、Касаткин (1999, с. 192-197)を参照されたい。また脚注 122 参照。

видѣния⁽¹⁷⁷⁾¹⁰⁷ — не възможно⁽¹⁷⁸⁾ писати — и цѣловахом тѣло святаго Савы⁽¹⁷⁹⁾¹⁰⁸ повара: 40 лѣтъ вариль⁽¹⁸⁰⁾ на братію¹⁰⁹ ясти⁽¹⁸¹⁾¹¹⁰. А другое — тѣло святаго Соломаниды⁽¹⁸²⁾¹¹¹. И ту стоит лотокъ⁽¹⁸³⁾, на нем же¹¹² вообразися⁽¹⁸⁴⁾ святая Богородица съ Христомъ¹¹³: проскурникъ⁽¹⁸⁵⁾ всыпа⁽¹⁸⁶⁾ муку на доску и възлия⁽¹⁸⁷⁾ воду, и въскрича⁽¹⁸⁸⁾ отроча в муцѣ⁽¹⁸⁹⁾ на доскѣ¹¹⁴. И проскурник, ужасеся⁽¹⁹⁰⁾¹¹⁵, тече⁽¹⁹¹⁾ къ игумену и братии⁽¹⁹²⁾¹¹⁶. И прииде⁽¹⁹³⁾ игумен и братия и видѣша⁽¹⁹⁴⁾ на доскѣ образ святаго Богородица съ младенцемъ съ Христомъ¹¹⁷. Церковь же та велика велми и висока, полатоу⁽¹⁹⁵⁾ сведена⁽¹⁹⁶⁾, иконы в ней, аки солнце сияють¹¹⁸, велми

¹⁰⁷ = видѣния。前掲 2 段落 6 行目の писаниと同様に、この綴りは第 2 次南スラヴの影響（второе южнославянское влияние）を受けている。10 世紀から 11 世紀の東スラヴ語は南スラヴの教会文献の流入に大きく影響され、更に 14 世紀から 16 世紀にも北西部と北東部で南スラヴ的な綴りや語彙が改めて規範として認識されるようになり、前者が「第 1 次」、後者が「第 2 次」の南スラヴの影響と呼ばれる。「第 2 次」では南スラヴ語らしい綴りを目指すあまりに、却って語源的に不必要な表記をしてしまう、いわゆる過剰修正が多々見られる。動名詞単数生格語尾は -ия と記して問題ないはずだが、東スラヴ語の /я/ に南スラヴ語の /a/ が対応する場合があることから（яко vs. ако など）、-ия と書かれることが多い。

¹⁰⁸ この箇所登場する 2 人の聖人について詳しいことは分かっていない。

¹⁰⁹ 脚注 116 参照。

¹¹⁰ 語源的に *ěsti (*ědmi) として再建されるが（希 ἔδω (édō), 羅 edō, 英 eat）、古教スで語頭の *jě- は ja- に転じるため、古文では ѣсти (ѣмь, ѣси, ѣсть...) と ясти (ямь, яси, ясть...) の 2 つのバリエーションがある。

¹¹¹ 脚注 108 参照。

¹¹² 古文で関係代名詞は [人称代名詞 + же] の形で表される。現露のように который が用いられるのは後代の文献に限られる。例) Отыче нашъ, иже еси на небесѣхъ! = Отче наш, сущий (который) на небесах!

¹¹³ o 語幹硬変化名詞の単数造格語尾は本来 -омъ であり、-омъ は複数与格語尾であったが、しばしば混同される。

¹¹⁴ 直前の муцѣ ならびに続く доскѣ は第 2 硬口蓋化が維持されているが (*mucě < *mukoi, *dūscě < *dūskoi)、ここでは доскѣ となっている。ロシア語は語幹を統一する傾向から、o 語幹硬変化名詞の所格ならびに a 語幹硬変化名詞の与格・所格における語幹末名詞の交替 (-з, -ц, -с < -г, -к, -х) が失効している (cf. 現露 доске < доска, 宇 дощѣ < дошка)。このテキストは 16 世紀前半の写本が基になっており、既に書き手の言葉で第 2 硬口蓋化が失効していたか、そもそも第 2 硬口蓋化の影響を受けなかった地域の方言が反映されていることが考えられる。

¹¹⁵ ужаснутися のような не 語幹動詞はアオリストが不定語幹から形成される場合 (ужаснуса) と、不定語幹から -ну- を落として形成される場合 (ужасеся) がある。

¹¹⁶ スラヴ語で語尾 -ija は集合名詞を形成した (cf. 現露 семья, 希 φρατρία (phratría) < PIE *-i-eh₂)。братья (< *bratŕija) も本来は形態上単数の集合名詞であったが、現露では брат の複数主格に補充されている (cf. 古東スの複数主格形 брати)。なお本文の братии は「はりつめた弱母音」が完全母音 и として記されている例である (< *brat-ij-i)。

¹¹⁷ ここでは古文でしばしば見られる前置詞の重複が現れており、造格で同格をとる младенцем と Христомъ の双方に前置詞 съ が置かれている。意味上は съ младенцем Христомъ 「子たるキリストと共に」と変わらない。

¹¹⁸ 現露では сияют だが、-на- の綴りは第 2 次南スラヴの影響による。脚注 107 参照。

украшены⁽¹⁹⁷⁾ златом, а дно церковное — много дивитися: аки женчюгом⁽¹⁹⁸⁾¹¹⁹ иссажена⁽¹⁹⁹⁾, и писцу тако не мощно исписати. Тако же и трапеза, идѣже братия ядятъ⁽²⁰⁰⁾. Велми чюдно, паче⁽²⁰¹⁾ инѣх⁽²⁰²⁾ монастырей, стоит на краи⁽²⁰³⁾¹²⁰, близ Златых вратъ. Ту жилъ Феодоръ Студискы¹²¹ и в Русь послал⁽²⁰⁴⁾ многы⁽²⁰⁵⁾ книги¹²²: Устав, триоди и ины⁽²⁰⁶⁾ книги.

【注 18】(175) = потом。(176) = Студийский。(177) о 語幹中性軟変化名詞 видѣние の単数生格。(178) = возможно。(179) а 語幹男性硬変化名詞 Сава (<Σάββας (Sábbas)) の単数生格。(180) i 語幹動詞 варити の完了分詞男性単数主格ないし現在完了 3 人称男性単数。(181) 無テーマ動詞 ѣсти の不定法。(182) а 語幹女性硬変化名詞 Соломанида (<Σολομώνις (Solomōnís)) の単数生格。(183) = доска。(184) i 語幹動詞 вообразитися のアオリスト 3 人称単数。(185) 「聖餅を焼く者」の意。(186) je 語幹動詞 всыпати のアオリスト 3 人称単数。(187) je 語幹動詞 возляти のアオリスト 3 人称単数。(188) i 語幹動詞 восклицати のアオリスト 3 人称単数。(189) а 語幹女性硬変化名詞 мука の単数所格。脚注 18 参照。(190) не 語幹動詞 ужаснуться のアオリスト 3 人称単数。(191) е 語幹動詞 течи のアオリスト 3 人称単数。(192) а 語幹女性軟変化名詞 братья の単数与格。(193) е 語幹動詞 приити のアオリスト 3 人称単数。(194) i 語幹動詞 видѣти のアオリスト 3 人称複数。(195) а 語幹女性硬変化名詞 полата (= шатер) 「斜面屋根」の単数造格。(196) е 語幹動詞 свести の受動過去分詞女性単数主格。(197) i 語幹動詞 украсити の受動過去分詞女性複数主格。(198) = жемчугом。(199) i 語幹動詞 иссадити 「派手に飾る」の受動過去分詞女性単数主格。(200) 無テーマ動詞 ѣсти の現在 3 人称複数。脚注 110 参照。(201) = более。(202) 代名詞 инѣ の男性複数生格。(203) о 語幹男性軟変化名詞 краи の単数所格。(204) je 語幹動詞 послати の完了分詞男性単数主格ないし現在完了 3 人称男性単数。(205) 硬変化形容詞 многы の女性複数対格短語尾。(206) 代名詞 инѣ の女性複数対格。

¹¹⁹ 現露 жемчуг は 12 世紀初出の外来語で、テュルク語を経由して中国語の「真珠」(中古音 tʃiēn-tʃiu、学研漢和 837、894 頁)に由来すると見られるが、古文では様々な綴りで現れる。詳しくは Черных, т. 2, с. 298 などを参照されたい。

¹²⁰ 語尾については脚注 88 参照。なお現露で見られる на краю のような第 2 前置格は ŭ 語幹名詞の格変化に由来すると考えられる (cf. наверху)。

¹²¹ ストゥディオスのテオドロス (Θεόδωρος ὁ Στουδίτης, Феодор Студит; 759-826) はストゥディオス修道院長を務めつつ、偶像破壊運動 (イコノクラスム) の反対者として皇帝や総主教と対立した聖職者である。

¹²² 脚注 106 で示したように、本来は軟口蓋音 г, к, х に前舌母音 и が続くことはないが、ここでは многы に対して книги と、また次文では книгы とあるように綴りの揺らぎが見られる。この原因としては、①書き手の言語で既に гы > ги が進行していたか、②反対に書き手の言語で гы > ги は進行していなかったが、他の地域の方言の影響を受けて ги の綴りが現れたことが考えられる。いずれにせよ、гы に対する ги の綴りは、ロシア語に特有の子音体系の形成と、音素 /y/ と /i/ の音韻的な並びに形態的対立の解消の過程を表すものである。

【訳 18】次に聖ヨハネの方、ストゥディオス修道院に行った。そこには見るべきものが書き表せないほど多くあって、40年間修道士たちの食事を作っていた、聖なる料理人サヴァの遺骸に接吻した。そしてもう一人、聖ソロマンダの遺骸にも同様にした。そこには、上にキリストと生神女が現れた、というまな板がある。聖パンを作っていた料理人がまな板に小麦粉を出して水をかけると、まな板の上の小麦粉の中で御子が声を上げた。するとその料理人は驚いて、修道院長と修道士たちの方へ駆けた。そして、修道院長と修道士たちが来て、彼らはまな板の上に生神女と御子キリストの姿を見た。その教会は大層大きく、高さもあり、斜面屋根が下がっていて、内部のイコンはまるで太陽が輝くように、金で立派に飾られていて、そして教会の床は、まるで真珠で華やかに装飾されているかの如く、また書き手が書き表すことができないほど、大変素晴らしかった。修道士たちが食事をするテーブルも同様である。他の修道院よりも大層驚くべきものであり、金の門の近くの、街の縁に立っている。ここに住んでいたのはストゥディオスのテオドロスで、彼はルーシへ多くの本を送った。典礼便覧、三歌斎経やその他の本などを。

[25] А въ Царьград, аки в дубраву велику внити: без добра вожа⁽²⁰⁷⁾¹²³ невозможно ходити, скупю или убого не можеш¹²⁴ видѣти ни цѣловати ни единого⁽²⁰⁸⁾¹²⁵ святого¹²⁶, развѣ на праздники которого святого будеть¹²⁷, то же видѣти и цѣловати.

¹²³ 現露の вождь は古教スの語形であり、ここの вожь は東スラヴ語的な形である。双方とも動詞 водити の語根*vod-に接辞*-j-を足して形成されるが (*vod-j-i)、*-dj-はヨット化により古教スで*-zd-, 古東スで*-ž-, 西スラヴ語では*-dz-ないし*-z-に転じる (cf. 勃 вожд, 現露 вожак, 波 wódz)。脚注 12 で見た母音重挿・非母音重挿、脚注 28 で見た成節的流音、脚注 79 で見た「はりつめた弱母音」、脚注 110 で見た語頭の*jě-などと同様に、ヨット化はスラヴ語の中で異なる反映形をもたらしており、現代ロシア語は古教スの影響が広く見られる。

¹²⁴ 動詞の現在 2 人称単数の語尾はかつて-шиであり、現露で ш が原則として硬子音であるにもかかわらず-шьと綴られるのは、この名残である。cf. 字 можеш。

¹²⁵ 1) 東スラヴ語で語頭の*(j)e-は j の脱落と母音の後舌化で o-となる場合があるのに対し、古教スで ю-ないし e-と記されるため、古文では одинъ/единь, озеро/езеро, олень/елень といったバリエーションが見られる。現露では「1」の派生語によって e-が定着しているものがある (единый, единица, единогласно)。2) 数詞の「1」は基本的に*edinŭ として再建されるが、2 つ目の母音があたかも「はりつめた弱母音」のように振る舞うため、одинъ, однь, единъ, еднь といった綴りで現れることがある (Срезневский. Т. 1. С. 816, 819; Т. 2. С. 616)。cf. 現露 одинаково vs. 字 однаково 3) 印欧祖語の数詞「1」である*eyno-/oyno- (羅 ūnus, 英 one) を直接引き継ぐのは現露 иной (<*jinŭ) であり、*edinŭ は*ed-と*jinŭ の 2 つの要素から成立したと考えられる。最初の要素は現露 едва, 羅 ecce「ここ」<*ed-ce?との関連が提示されているが、確定的ではない。詳しくは Фасмер. Т. 3. С. 122; ЭССЯ. Т. 6. С. 11–13; Derksen (p. 138–139); ЕСУМ. Т. 6. С. 159 を参照されたい。

¹²⁶ 脚注 4 で示したように、形容詞の男中性単数生格語尾は本来-аго<-аего<*ajego であり、本文で святого が 21 回現れるが、現露と同じ святого も 3 回書かれている。この新しい語尾は тъ や одинъ が取る代名詞硬変化の語尾 (того, одного) からの類推と考えられる。

¹²⁷ 脚注 77 参照。

【注 25】(207) о 語幹男性軟変化名詞 **вожь** (= **вождь**) の単数生格。(208) 数詞 **единъ** (= **одинъ**) の男性単数生格。

【訳 25】コンスタンティノーブルに足を踏み入れるのは、深い森の中を進むようなものだ。良き案内人がいなければ見て回することは不可能であり、お金を出し渋るあるいは貧しい場合、一人の聖人をも見られず、接吻することも叶わないだろう。その聖人の祝日である時のみ、聖人を見て、接吻することができるのである。

[26] **Оттоле поидохом**⁽²⁰⁹⁾ **къ Иерусалиму**.

【注 26】(209) е 語幹動詞 **поити** のアオリスト 1 人称複数。

【訳 26】そこから我々はエルサレムに向かった。

さいごに

三谷先生のロシア語史の講義では、スラヴ語史の概略に続き、古東スラヴ語の音韻的・形態的・統語的特徴が詳しく解説された。当初は実践的な文献の読解も行われる予定であったが、三谷先生の体調悪化により 12 月 20 日の第 9 回を以て授業は中断された。本稿で扱った旅行記は最終回に自習課題として出されたものの一つであり、当時の履修者が読解ならびに文法的注釈に取り組んだ。執筆にあたっては元上智大学教授の原求作先生からの助言を得た。ここに記して感謝を表したい。無論、全体の責任は執筆者が負い、三谷先生の講義で得た知識を十分に応用できたことを願うものである。

参考文献

学研漢和 = 藤堂明保編『学研 漢和大辞典』学習研究社、1978 年。

佐々木 (1985) = 佐々木秀夫『ロシヤ古文典《音韻考》』ナウカ、1985 年。

中沢 (2011) = 中沢敦夫『古文鑑賞ハンドブック』群像社、2011 年。

原 (1996) = 原求作『ロシア語史講話』水声社、1996 年。

原 (2021) = 原求作『古代教会スラヴ語入門』水声社、2021 年。

Derksen = Rick Derksen, *Etymological Dictionary of the Slavic Inherited Lexicon* (Brill: Leiden, 2008).

EtymWb = Wolfgang Pfeifer et al., “Etymologisches Wörterbuch des Deutschen (1993)”

[<https://www.dwds.de/d/wb-etymwb>] (2022 年 11 月 14 日閲覧).

Majeska (1984) = George P. Majeska, *Russian Travelers to Constantinople in the Fourteenth and Fifteenth Centuries* (Washington: Dumbarton Oaks Publications, 1984).

ODB = Alexander P. Kazhdan, Alice-Mary Talbot, Anthony Cutler, Timothy E. Gregory and Nancy P. Ševčenko, *The Oxford Dictionary of Byzantium* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1991).

Блатна (1985) = Блатна Р. Ударное русское е и историческое объяснение его современной реализации е/о (переход 'е > 'о в русском языке) // Sborník prací Filozofické fakulty Brněnské univerzity. Řada jazykovědná. 1985. № 33. С. 31–38.

Дмитриев (1999) = Дмитриев Л. А. Хождение Стефена Новгородца // Библиотека литературы древней Руси. Т. 6. / Под ред. Л. А. Дмитриева и др. СПб., 1999.

ЕСУМ = Етимологічний словник української мови. В 7 т. / За ред. О. С. Мельничука та ін. К., 1982-.

ИГРЯ-2020 = Историческая грамматика русского языка. Энциклопедический словарь / Под ред. В. Б. Крысько. М., 2020.

Касаткин (1999) = Касаткин Л. Л. Современная русская диалектная и литературная фонетика как источник для истории русского языка. М., 1999.

Псковская 3-я = Псковская 3-я летопись // Псковские летописи. Выпуск второй / Под ред. А. Н. Насонова. М., 1955.

Срезневский = Срезневский И. И. Материалы для словаря древнерусского языка по письменным памятникам. В 3 т. СПб., 1893–1912.

СДРЯ = Словарь древнерусского языка (XI–XIV вв.). В 10 т. / Под ред. Р. И. Аванесова и др. М., 1988-.

Сперанский (1934) = Сперанский М. Н. Из старинной новгородской литературы XIV века. Ленинград, 1934.

СРЯ XI–XVII = Словарь русского языка XI–XVII вв. / Под ред. С. Г. Бархударова и др. М., 1975-.

Фасмер = Фасмер М. Этимологический словарь русского языка. В 4 т. / Под ред. Б. А. Ларина и др. М., 1986–1987.

Цейтлин = Старославянский словарь (по рукописям X–XI веков) / Под ред. Р. М. Цейтлина и др. М., 1994.

Черных = Черных П. Я. Историко-этимологический словарь современного русского языка. В 2 т. М., 1999.

Шахматов (1909) = Шахматов А. А. Несколько заметок об языке псковских памятников XIV–

XV века // Журнал Министерства народного просвещения. Новая серия. 1909. Ч. 22. С. 105–177.

Шевелева (1993) = Шевелева М. Н. Аномальные церковнославянские формы с глаголом *быти* и их диалектные соответствия (к вопросу о соотношении церковнославянской нормы и диалектной системы) // Исследования по славянскому историческому языкознанию: памяти профессора Г. А. Хабургаева / Под ред. Успенского Б. А. и Шевелевой М. Н. М., 1993. С. 135–155.

Щепкин (1906) = Щепкин В. Н. Болонская псалтырь. СПб., 1906.

ЭССЯ = Этимологический словарь славянских языков / Под ред. О. Н. Трубачева и др. М.: 1974-.

“The Journey of Stefan the Novgorodian”:
Translation of Fragment into Japanese and Grammatical Commentary

IKEZAWA Takumi, KATSUMATA Natsumi, KAMAKURA Keigo

This paper is a term report of the special research course on Slavic linguistic culture “History of the Russian language”, held in the autumn semester of the academic year 2021/2022 under the direction of Prof. Dr. Keiko Mitani at the Department of Slavic Languages and Literatures, University of Tokyo. The article presents a translation into Japanese and a grammatical commentary on a passage from the Old East Slavic written work “The Journey of Stefan the Novgorodian”, which is a record of his travel to Constantinople in 1348 or 1349.

We provide phonological, morphological, syntactic, and lexical comments on the manuscript from the first half of the 16th century, published in the sixth volume of the *Library of Literature of Ancient Rus*’ (БЛДР). Particular attention is paid to the characteristics of the Old East Slavic text in comparison with the modern Russian literary language, with the aim of providing practical material in reading old written works for future students.